コラム きのうきょう

僕のトレードマーク

文＆写真　学生記者　山田俊輔（法学部３年）

いつからだろう。天パ（天然パーマの略）に好感が持てるようになったのは。

母親譲りの天パにコンプレックスを感じていた。幼いころ、母に向かって「なんでお母さんや僕（の髪）は、ライオンみたいになるの？」と怒ったように聞いたことすらある。

頭髪を意識したのは小学校入学時。同級生に「綿あめみたいだね」と言われたことから始まる。綿あめ→スチールウール→天然芝→アルパカ…。付けられるあだ名は全て天パに関連したものだった。

悪意を感じるものから好意を持てる可愛らしいものまでさまざま。高校に入ってもそれは変わらなかった。先輩から「お前、なんで頭にトイプードル、乗っけてるんだよ」と言われたときは、その巧みな表現力に驚いたものだ。

そんな日々を送ってきたからだろう。天パを好きにはなれなかった。帽子好きの僕は、天パを目立たせないようにするため、隙あらば帽子をかぶった。小学校時代の登下校には必ず黄色い安全帽。中学で部活動（硬式テニス）が始まると日よけの帽子。日よけと言いながら、雨でも雪でもかぶっていた。帽子をかぶる毎日は高校でも続いた。

大学生となり、その日の気分に合わせてキャップ、ニット、ハットなど何かしらをかぶって通学した。ある日、友人Kが話しかけてきた。

「いつも帽子をかぶってるよね、パーマと合ってるよ。君のトレードマークだ」

あ、そうなんだ。忌み嫌ってきた天パは嫌われるばかりではないことを初めて知った。この瞬間から、「帽子＝隠れ蓑」から「帽子＝トレードマーク」に変貌した。

多摩キャンパスの夕暮れ

抱いていた悪いイメージは大きくチェンジした。帽子からはみ出す、気に入らなかったウネリもハネも、それはそれでオシャレにすら思えてきた。

今でも何かマイナスイメージで言われることがある。しかし以前のような不快感はもう消えている。昔の友達は会えば、僕の頭髪をあーだこーだと言う。「もしも僕が天パじゃなかったら、この人の記憶に残っているのかな」。そんなことを考えるまでにいたった。

天パは僕が僕であるための必要なアイデンティティなのだ。

「縮毛矯正」や「ストレートパーマ」をよく勧められた。ヘアアイロンで真っ直ぐに伸ばすことはあっても、そういったものに頼ったことはこれまで一度もない。自分自身を完全否定するようで、どこか避けてきたのかもしれない。

帽子をかぶることで自分のコンプレックスから目を背けてきたが、友人の一言をきっかけにこれまでと違った見方ができるようになった。

天パを嫌った僕は過去の人。これからは天パを僕の一番の特徴として生きていく。

心を覆っていた雲は晴れた。明日も明後日も、僕は“ぼさぼさ、くるくる”の頭髪に帽子をかぶって家を出る。

マイコレクション